

エッセイ — 特集：複数言語環境で成長する子どもたちはどのように言語と向き合い、生きようとしているのか

継承語の支援とキャンプの可能性

欧州日本語親子キャンプへの参加を含め

西山 千香子*

© 2024. 移動する子どもフォーラム. <http://gsjal.jp/childforum/>

1. はじめに

この夏、娘と二人で、おとぎ話の世界のような街並みをもつエジンバラで開催された、欧州日本語親子キャンプに参加した。私たちの他にも、フランス、イギリス、ドイツ、ノルウェー、スイスなどヨーロッパの様々な地域から、日本にルーツのある子どもたち・リーダーたち・家族が集い、時間と体験を共有する宝物のような三泊四日であった。娘はキャンプについて多くは語らなかったが、帰途「日本語が話せる子とは友達になりやすいんだよね」と呟っていたのが印象的である。また、子どもを産む前から、生まれてくる子どもと言葉のことばかり考えていた私にとっても、子どもの継承語支援とキャンプの可能性について考えさせてくれる貴重な機会であった。

2. 私たちの家族と言語環境

私には、このキャンプに参加した9歳の娘と6歳の息子がいる。私たちは、家族としてスタートを切った時は日本在住だったが、現在はオランダの比較的国際色の強い都市に住んでおり、短期的な将来、日本帰国の予定はない。居住している街は、オランダ以外の国にルーツの

* オランダ在住 (Eメール: jbceindhoven@gmail.com)

ある居住者が多く暮らしているが、日本語を話すグループはマイノリティである。私の母語は日本語で、パートナーである夫の母語はオランダ語である。夫婦間は英語、二人の子どもたちと私は日本語、子どもたちと夫はオランダ語、子どもたち同士は主にオランダ語、夕食時など家族が揃った時は三つの言語をそれぞれが使いやすい様式でやりとりをしている。今までを振り返り、子どもたちを取り巻く言語環境についてフェーズごとに紹介する。

2. 1. 生まれてから保育園入園まで

娘と息子は共に日本で誕生している。生まれた時から、私たち親はそれぞれの母語で子どもに話しかけ、あやし、なだめ、童謡を歌い、のちに絵本を読んでいた。一人一言語の原則に沿ってそうした訳ではなく、お互いに「自分の赤ちゃんに話しかけるのは、自分のこの言語しか考えられない」という気持ちから私は日本語、夫はオランダ語で接していた。寝不足の中、小さく儂げに見えながらも大声で泣く子どもの世話に右往左往しながら、「確かに、今この子にsweetie (英語でかわいい子) などと呼びかけるのは全く腑に落ちないな」など、理論ではない自分の内的な言語選択をふと自覚する瞬間もあった。長女は生後8ヶ月まで、そのおおよそ3年後に生まれた長男は生後5ヶ月まで、育児休業を取得した私と日中過ごし、夕方以降と週末は夫を交えて主に家族で過ごしていた。私たち以外には、近居であった私の両親である日本側の祖父母やご近所の方からも、子どもたちは日本語で可愛がってもらっていた。二つの言語と接していた割合は、この時期日本語8～9割、オランダ語1～2割程度だろうか。月齢が進むと、身近な物(オムツ、ぬいぐるみ、よだれ掛け、など)の名前を聞くとその物品の方を向くなど、日本語もオランダ語も同程度に単語を理解している様子を見せていた。

2. 2. 保育園入園から渡蘭まで

上述の通り長女は生後8ヶ月から、長男は生後5ヶ月から、近所の公立保育園に通った。平日日中は年齢が近い仲間(大多数が家庭で日本語を使用)及び日本語話者である保育士の先生方と過ごし、夕方以降と週末は父母である私たちと主に過ごしていた。子どもが小さな社会に出たタイミングであり、日本語に接する時間と、日本語を話す関係性の強い他者が増えた時期である。子どもたちは日本語を使って主体的に遊び、やりとりやかけひきを行い、関係性を築き、保育の専門家から提示された教材や豊かな語彙に接し、歌を歌い発表を行うなど体験を通して日本語を吸収していった。週末も公園で近所の子どもたちと遊ぶようになり、この時期の子ど

もたちの社会の広がり日本語を基盤とした広がりであった。

日本語を通した体験や経験が爆発的に増えていたこの時期、オランダ語の使用場面や語彙も子どもの成長により多少広がりを見せたが、「パパの言葉」に限定されていた。娘も息子も、夫が話すオランダ語を文レベルで理解はしていたが、夫にオランダ語で話しかけられると日本語で返すことが多く、オランダ語の発語はごく簡単な内容に限られていた。敢えて区分するのであればこの時期は受動的バイリンガルであったと言える。日本語(話す、聴いて理解する)の発達は二人とも年齢相応の範囲内であり、姉弟間の会話はほとんど全てが日本語だった。

2. 3. 渡蘭から現在まで

オランダへ引っ越した後、6歳だった娘はオランダ語のみで授業が行われる現地の小学校(以下、現地校)に編入した。2歳10ヶ月だった息子は、しばらく週に数日オランダ現地の保育園に通い、のち4歳から娘と同じ小学校に入学した。現地校に加えて、娘は日本の就学年齢に達した時から毎週土曜日に日本語補習授業校(以下、補習校)に通い始めた。

娘が6歳で、息子が4歳でそれぞれ現地校に通い始めてから、語彙が増え構文が複雑になるなど、オランダ語が目覚ましく伸びていったように思える。私自身のオランダ語理解力の限界により厳密には判断できないが、話すには至らずともオランダ語を聴いて理解していた時期の蓄積を経て、オランダ語の表出が開いたのかもしれない。在住都市には、家庭内言語がオランダ語以外であり、学習に先立ちオランダ語の習得が必要と評価された子どもたちが期間限定で通うオランダ語訓練校がある。また、訓練校ではなくとも、オランダ語が母語ではない生徒に追加教材を配布したり、その親向けにレクチャーをしたりと言語サポートをしている現地校もある。しかし、娘と息子は、ある程度オランダ語を理解していたことから、これら言語支援の対象にはならなかった。この時期、オランダ語での学びが広がり深まるにつれ、子どもが脳内でイメージして、オランダ語では名称を言えるが日本語ではすぐに呼称できない単語も増えていった。オランダへ引っ越して約一年経った頃、学校から家に自転車で帰宅中、娘が会話の中で「なんかこの靴、足があたるんだけどさ、*tenen* (オランダ語でつま先の複数形) って日本語でなんて言うんだっけ。」と私に聞いたことがあった。これが私にとって、娘が自覚的にオランダ語では言えるが日本語ではすぐに名称が出てこない語彙を初めて教えてくれたタイミングだった。ただ、本人の中ではもっと前から“日本語では呼称できない単語や概念”が育っていたことと推察する。日本語を獲得して、何不自由なく使っていたしばらく前の自分の記憶が

あるからか、「あ〜、日本語忘れちゃったな。」と娘が述べることも何度かあった。オランダに住み始めて数ヶ月後には、子どもたちは夫に日本語ではなくオランダ語で話すようになった。また、姉弟間の会話は徐々にオランダ語の割合が増え、特に息子が小学校に入ったタイミングではその割合が飛躍的に増えた。

以上が、私たちの二人の子どもの、誕生から現在までの言語環境の変遷である。次に姉弟関係について述べた上で、現時点の二人の言語使用の様子を記す。

2. 4. 姉弟の言語使用

娘と息子は、年齢は異なるものの取り巻く言語環境が似ており、共有している体験も多いため、日蘭ともに理解している共通語彙が多い。また、日本語環境からオランダ語環境へのダイナミックな移行を共にし、どちらの言語をふと漏らしてしまっても問題なくコミュニケーションを取れる、言葉の同志のような存在である。子どもたち同士の会話を聞いていると、普段はオランダ語中心で時に日本語の語彙が混ざるが、日本に旅行に行つてポケモンカードを選んでいる時などは、日本語を基に文章を組み立て、オランダ語の語彙を混ぜて話していることもある。また、二人で話している際、近くに日本語話者が多いと日本語の割合が高く、オランダの祖父母宅などオランダ語話者が多いとオランダ語の割合が上がるといった、会話には加わっていない背景にいる人たちの言語特性により、意識的なのか無意識的なのか変動することもあった。娘にとってはこの弟が、言語の選択をさほど意識せずに話せる最も身近な相手である。

渡蘭時の年齢も異なり、当然子どもの内的な特性も異なるため、観察できる範囲での娘と息子の言語使用には違いもある。娘は、全ての場面でオランダ語が優位かというところではなく、ソファに寝転んで楽しみながら読むような本は日本語である。一方の息子は、文字言語は習得中なのでやりとりからの推察になるが、オランダ語が優位だと感じる場面が多い。

例えば表出言語を見てみると、娘は現在、固有名詞や日本語に翻訳しにくい語彙を除いて、私を含め日本語話者には日本語のみで話す。

(例：「この家で kaasschaaf (チーズを薄くスライスする専用ナイフ) を使うの一番上手なのはパパだよ〜。」8歳3ヶ月時)

息子は、頻繁に使う言い回しは日本語のみで話すこともあるが、大抵の場合、私やオランダで出会う日本語話者に対しては日本語の構文にオランダ語の語彙を入れて話す。

(例：「Juf (先生) が voorlees (読み聞かせ) した Nederlands (オランダ語) の boekje

(本+指小辞)に, Japans (日本)の人がいたんだよ。ママ, 知ってる?」5歳4ヶ月時)

彼のコード・スイッチングを見ていると, 日本語とオランダ語とその混成発話がスペクトラムのように場面や対象によって濃淡を見せる。6歳になった今, 大まかに分けるのであれば①オランダ語のみ(現地校の友人やオランダ側の親戚など広く現地の人相手), ②オランダ語構文に日本語の語彙を載せる(姉や日蘭家庭のお友達相手), ③日本語構文にオランダ語の語彙を載せる(母親やオランダで出会う日本人相手), ④日本語のみ(日本の祖父母相手), と四つあるようで, そのうち②の 때가最も早口で言い淀みなく, 一文ごとの文章も長く, 本人にとっては一番楽なようである。彼は寝ぼけている時や独り言は②のオランダ語主幹モードで呟いており, 興奮したり急いでいたりすると私にも同じオランダ語主幹モードで捲し立てることがある。娘はそんな息子の発話を聞いて, 「ママ, 日本語とオランダ語を混ぜないように教えたほうがいいよ。」と私に進言したり, 弟に直接「混ぜ混ぜ語はよくないよ。」と伝えたりしている。こういった発言から, 娘自身は日蘭の言語をなるべく混ぜることなく, 発話時は言語を統一した方が良く考えていることが分かった。実際, 娘本人は今までの成長過程において, オランダ語と日本語を多分に混ぜて話す時期はほとんどなかったように記憶している。

3. 継承語支援

このような背景を持つ子どもたちに, 親としてどのような継承語支援を行うことが良いのか, フェーズごとに考え悩みながら進んでおり, 目標や家庭内の方針を考えては変更することを繰り返していた。影響を与える要因が多く, 何より個別性が高く, 誰にでも当てはまる大正解はないのだろう。また, 敏感期のうちに言語を習得してほしいという守りの姿勢, 失敗させたくない, もしくは親として失敗したくないという漠然とした不安, 社会の中での自らの言語的孤立など, 親である自分の課題も作用している。子どもたちの意思を尊重したい, また親として尊重する自分でありたいと願っているが, いつから子どもの判断に委ねるのが良いのか分からず, 日本におけるオランダ語学習や, オランダにおける日本語学習の意思決定の主体に悩むこともあった。以下, 今回のキャンプに参加した娘の継承語支援の過程を記す。

3. 1. 日本在住時

日本に住んでいた時期, 娘は4歳頃から, オランダの祖父母など自分の父親以外のオランダ

語話者から話しかけられると口をつぐみ、表情が沈み、指さしなど動作のみで応答することが増えた。普段から色々な人とオランダ語で遊んだり話したりする機会があった方が良いのかもしれないと考え、StichtingNOB¹に掲載されている、オランダ語で学ぶ海外在住児童向けプログラムへの参加を考えた。この時は、日本の就学年齢になったらもう一度検討する、と夫婦で合意して参加は見送った。また、弟が生まれ二人育児になり、私たちが忙しくなったことから、積極的にオランダ語での遊び仲間を探すことはできなかった。日本により長く在住していたら、どこかの段階で遊び場や学び場に参加していたかもしれない。しかし、夫はフォーマルな形で継承オランダ語教育は必須ではないと考えていたので、全く参加しなかったかもしれない。

よってこの時期は、オランダ語の絵本を読み聞かせたり、オランダにルーツのある子ども向けの文化イベントに参加したり、オランダ側の親戚とテレビ電話をしたり、可能な範囲でオランダに旅行をしたりと、緩やかな方法で娘にオランダとオランダ語を紹介していた。

3. 2. オランダ移住以降

オランダへ引っ越した後は、日本語が継承語教育の対象となった。オランダの主要都市では継承日本語レッスンが開催されており、試しに一度ライデン市内のレッスンに参加させてもらった。娘は活発に話し、クイズに取り組み、興味のある平仮名を書く練習ができ、先生に丁寧な接してもらい、大満足であった。一つの理想的な形だと考えたが、定期的に通うには遠く断念した。タイミングとしては年長の秋になっており、隣町にある補習校のオープンデーに参加し、翌年春から一年生として入学することとした。

補習校では、熱心な先生方と、同じようにオランダで日本語で学ぶ、数少ないお友達とともに、日本の検定教科書を使い国語と算数を学んでいる。オランダの学期に合わせ年間40回、毎週土曜日6時間授業があるため、運営方針も様々な数ある補習校の中でも、しっかりとカリキュラムに沿って進めている学校である。平日のオランダ現地校では控え目で静かな娘は、補習校では水を得た魚のようによく発言し、休み時間は鬼ごっこなどを自ら提案し、よく遊びよく遊んでいる。彼女にとっては、日本語を話す自分でいられる学び場は居心地が良いようで、土曜日の朝は自分でアラームをセットして起き、着替え、朝ごはんを食べ、歯を磨き、親を急

1 StichtingNOB: Stichting Nederlands Onderwijs in het Buitenland の略称。オランダ国外でオランダ語で学ぶ子どもたちを支援する法人。教育機関の種類、年齢段階、設置国ごとにオランダ語で教育を受けられる機関や場所を検索できる。

かしてバス停に行っている。親に急かされて登校準備をしている平日とは真逆の風景である。通える距離に補習校があり、娘が前のめりで通っており、辛抱強い先生方に教えてもらい、貴重な学び仲間ができていることは幸いであり、補習校の存在には感謝してもしきれない。日本語の漫画・本・アニメなど魅力的なコンテンツを楽しんだり、日本に一時帰国する際は同年代の子どもたちと交流したりと、他にも日本語に触れる機会を設けてはいるが、今の娘にとっては、補習校とそこで出会うお友達との時間が日本語の学びの核になっていることは間違いない。ただ、補習校は日本の義務教育課程に準じた教育であることから、どこかの段階で継承日本語教育に切り替える可能性もあると考えていた。

そのような中、娘が7歳になった頃、「通うのは楽しいが、宿題をしている時間が苦痛なので補習校を辞めたい」と何度か述べる時期があった。まずは補習校以外の学び場を試してみようと提案し、フランスのオンライン継承日本語コミュニティ‘EKKA’のレッスンにお試し参加させてもらった。講師の方が「落語」「海の環境」といったテーマ学習を日本語で展開してくれるおおよそ週1回1時間のグループレッスンで、他の参加者とも年齢が近く、娘は積極的に発言し、学び仲間と絵文字を送り合ったりとリラックスしながら取り組み、すぐに継続受講を決めていた。また、このレッスンを通して少なからずフランスにも興味を持ったようである。結局、補習校も続けたいと本人が考え直し、現在は補習校とオンラインレッスンの両方に参加している。このオンラインレッスンを通して、私たちは夏の欧州日本語親子キャンプにめぐり合うことができた。

4. 欧州日本語親子キャンプ

欧州日本語親子キャンプとは、2022年デュッセルドルフ、2023年オスロでの開催に続き、2024年夏にスコットランドのエジンバラで三回目が開催された宿泊型のキャンプである。欧州在住の、日本にルーツのある行動力のある家族が中心となって運営されている。自分たち家族と共通点を持つ親子とのキャンプ開催を知り、キャンプが大好きな私はいつか必ず子どもと参加したいと考えていた。断片的ではあるが、私個人の組織キャンプ参加の体験や、子どものために開催されているキャンプを一部紹介した上で、欧州日本語親子キャンプの参加体験について述べる。

4. 1. 組織キャンプと対象の広がり

私は小学生時代を駐在員の帯同家族として米国で過ごした。米国での小学生時代に現地の YMCA² キャンプに何度か参加し、12歳で日本に帰国した後は日本の YMCA キャンプに参加するようになった。そのまま日本国内の大学に進学した後は、立場を変えボランティアリーダーとして YMCA キャンプに関わるようになった。ボランティアリーダーのトレーニングで「自然環境の中で、訓練された指導者とともに、目的をもって行われる」ものが組織キャンプであると学び、キャンプは個人が全人的に成長する場になりうると、教わると同時に何度も目の当たりにした。このような経験から、自分自身もキャンプに育ててもらったと感じている。実際に YMCA のキャンプを通して、私は一生涯の友人に恵まれ、人のためになる生涯を送りたいと考えるようになった。

YMCA に限らず、北米、ヨーロッパをはじめ日本でも、様々な形でキャンプが行われている。年齢や性別などで区切り、広く“子ども”を対象としたキャンプも多々あるが、特定の共通点を持つ子ども・ユース・成人のために実践されているキャンプもある。こうしたキャンプの例をいくつか述べると、吃音があったり場面緘黙があったりと発話を通したコミュニケーションに配慮が必要な子どもたち、アトピーがあったり肢体不自由があったりと身体・健康上の留意が必要な子どもたち、障害のある子どもの兄弟姉妹や依存症のある親を持つなど心理的な配慮が必要な子どもたち、家族の介護やケアを日常的に担っているため普段は自分のニーズが満たされにくい子どもたちを対象にしたキャンプなどがある。これらキャンプの中には、関連した治療や訓練をプログラムの核にしているものもあるが、多くは共に過ごし、存分に楽しむことを中心にプログラム立案をしている。つまり、こうしたキャンプでは、集うことの結果として個人の成長や集団としての自己肯定感の高まりにつながることはあるが、全てのキャンプにおいて特定のスキル習得など評価できるアウトカムを目的にしているわけではない。

4. 2. キャンプと言語

YMCA に話が戻るが、特定の言語を共通項とする子どもたちや、逆に特定の言語の外もしくは辺縁にいたることが共通項となっている子どもたちを対象としたキャンプもある。例えば1979年から綿々と、北米在住の日本語話者の子どもたちを対象に、Tokyo - Frost Valley

2 YMCA: Young Men's Christian Association の略称。世界各国と地域で、地域や人々のニーズに合わせたプログラムを展開する NGO。

YMCA Partnership がキャンプを運営している。また、日本国内に住む非日本語使用家庭の子どもたち向けに、近年東京 YMCA と東京 YWCA³が合同で、外国にルーツのある子どものサマーキャンプを開催している。また、音声言語ではなく手話で主にコミュニケーションを行い、ろう文化の中で育つ子どもたちを対象としたキャンプもある。

4. 3. 欧州日本語親子キャンプの概要

欧州日本語親子キャンプは、その名前の通り、空間的に欧州に在住していること、及び日本語につながりがあることが参加者の共通項である。このキャンプは、6歳以上の子どもがいる複言語家庭の親子を対象とした、宿泊(今回は三泊四日)形式であり、子ども同士・家族同士がつながることを目的としている。キャンプ前に子ども向け、保護者向けそれぞれのオンライン交流会があり、キャンプ後は子ども向けにオンライン交流会も開催された。今年は15家庭の親子が集い、そのうち複数のご家庭は参加者でありつつも全体の企画・運営を担っている。家族以外には、子どもたちのアクティビティを企画し、中心となって進めるリーダーの方々と、リーダーたちをサポートするスーパーバイザーの方々も参加していた。リーダーたちやスーパーバイザーたちは、同じように日本語を含む複言語家庭の出身であったり、海外に住む日本語話者や学習者であったりと、何らかの形で日本語につながりのある複言語話者の方々である。キャンプ中、スコットランド伝統芸能であるケイリー・ダンスなど特別な親子合同プログラムもあったが、子どもたちはリーダーや仲間たちと主に過ごし、親は自由に交流したりエジンバラを楽しんだり、親子別行動が多かった。私と娘は同じホステルに滞在したが、娘は年上のお姉さん二人と三人部屋、私は同じように母娘で参加された日本語話者のお母様と二人部屋でキャンプ期間を過ごしている。このような並行活動は、時折子どもたちの活動の様子を遠くから見ることができる、絶妙な距離感であった。

4. 4. 娘のキャンプ参加

欧州日本語親子キャンプの概要を伝えて参加を提案した際、娘は迷うことなく参加に意欲的だった。過去のキャンプ動画を youtube で見て、「だるまさんが転んだするの?」と聞くなど、行く前からプログラムを楽しみにしていた。初めて参加するため、他の子どもたちとも

3 YWCA: Young Women's Christian Association の略称。女性がリーダーシップを発揮し、人権・平和・環境を大切にすることを旨とする国際 NGO。

リーダーたちとも実際に会ったのはキャンプ当日であったが、強い不安はなかったようである。キャンプに参加するためにエジンバラ空港からホステルに向かうトラムの中で、「ママと一緒にだけど、ママがいなくても大丈夫だと思う。」と言っており、心強く感じたことを覚えている。

実際にホステルに到着すると、事前オンライン交流会があったこと、キャンプが受容的な雰囲気であること、また、もしかしたら日本語環境であることも手伝って、自然に集団に入っていくように見受けられる。キャンプ中は、楽しみにしていたカレー作り、トレジャーハンティング、特技などを披露する子どもタイム、ビンゴ・ゲーム大会、ナショナルミュージアム訪問など、娘がわくわくするようなプログラムが盛りだくさんであった。また、プログラム出発前におにぎりを自分たちで握ったり、街中のアイスクリーム屋さんに寄ったりと、合間の時間も工夫されており、傍目で見ているにも楽しそうに過ごしていた。リーダーたちの存在は、娘にとって大きな安心材料の一つであったと思われる。元来、娘はベビーシッターの学生や友人の兄・姉など、青年から若い大人の世代に遊んでもらうことが大好きである。そのため、若いリーダーやスタッフが自分のことを気にかけてくれた三泊四日は、居心地が良かったのではないだろうか。キャンプ後半には、年齢の近い女の子と特に仲良くなり、博物館で同じシリーズのペンダントを購入していた。面白いことに、最近学校のクイズで「無人島に持って行きたいもの」を聞かれ、考えたのちにこの時スコットランド・ナショナルミュージアムで購入したペンダントを持って行くことと答えていた。

5. キャンプと継承語支援

娘にとって欧州日本語親子キャンプの三泊四日はどのような時間で、どのような場所になったのだろうか。9歳になり、娘は社会の中で人とのつながりや物理的な場所を基盤とした居場所をいくつか持っている。例えば、家庭、現地校、補習校、習い事、日本の保育園仲間などが場所であり、大きさは様々で、重なりつつ、場所そのものも変容し続け、本人の心との親密度も常に変わり続けている。このような、本人にとって大切な場所、もしくは心理的につながった居心地の良かった思い出を今後も増やしながらか、娘は成長していくことだろう。今回のキャンプは、固定した物理的な場所ではないが、娘にとって心地良い一つの複言語の場所になったのではないだろうか。

このキャンプで、娘は普段の学習言語や得意な言語が異なる日本語話者仲間と交流できた。

日常生活で主に使う言語がフランス語でもドイツ語でも英語でもノルウェー語でも自分のオランダ語であっても、日本語ができるからつながることができ、「日本語ができて良かった」体験を、楽しいアクティビティの中で重ねることができた。今まで娘にとって、日本語は日本国内もしくはオランダの小さな日本語コミュニティでのやりとり手段に限られていたため、キャンプを通して、日本語でつながることのできる、より広いコミュニティを発見できたのは彼女にとって特別な体験である。

また、娘にとっては、例え自分の日本語と相手の日本語が違って、それぞれが日本で話される主流の日本語でなくとも、知り合い、交換したい情報を交換し、時に共感し、個人それぞれの日本語を通してつながる経験ができた。自分たちが各々の場所で学んで身につけている日本語を通して、共に楽しむことができたのである。これも傍から見ていた親として嬉しい場面で、「自分の日本語で、できた」体験であったと言えよう。

さらに、娘の普段の生活では、二つ以上の言語が共存する場面ではオランダが軸となりやすい。例えば、「オランダ語で英語」を教える先生、「オランダ語とトルコ語」を話す仲良しのお友達、「オランダ語の字幕があるフランス語」の映画、「オランダ語と日本語」を共有する補習校のお友達、など、オランダ語と他言語の組み合わせとなる。その点、このキャンプではヨーロッパという場所で開催されているながらも日本語が軸となっていたことが貴重な状況である。

6歳を過ぎた頃から、娘は「私は何人なの?」「私はハーフなの?」といったまっすぐな質問や、「オランダの学校(現地校)の友達でも、もし日本語ができたら補習校に来るの?」「日本の保育園の友達も、そのうちみんなオランダに来るの?」といった、自分の空間的な移動や学習言語が二つあることに関する疑問を、その都度親に投げかけている。複言語環境で成長するにあたり、今後も疑問を持ち、自分で考えたり悩んだりすることがあるかもしれない。そのような際、移動だけでなく集う人たちの背景や特性によっても軸が変わり得ることを体感していると、その時々言語や文化の軸を、固定せずに捉えられるのではないかと期待する。

6. おわりに

成長の途中で言語環境が変わった子どもの継承語支援について振り返ると同時に、母娘で参加したキャンプの体験を記した。キャンプに参加する前までにも、私たち親子には複言語を巡るドラマがあった。ペースは違えど、二つの言語を並行して獲得していく子どもの成長に立ち

会えることは日々深い喜びがあり、時に葛藤をもたらす。参加された他のご家庭はどうだっただろうか。

三泊四日のキャンプは短い。しかし、この短い時間と居心地の良い空間を共有したことで、キャンプに参加した後の私たちのドラマには将来に渡る変化があるだろう。すぐに眼に見える変化ではないかもしれないが、自分の日本語で、住んでいるヨーロッパで、人とつながることができた娘は、きっと今後も同じように大切な人とつながることができるだろう。改めてキャンプの力と面白さを感じると共に、子どもの持っている力も見せてもらった思いである。

欧州日本語親子キャンプは、ヨーロッパ各地に住む、日本語につながりを持つ親子が集う場と時間を作ってくれた。このような場所は作らないと存在しないし、作る人がいないとできない。貴重な能力、時間、ネットワークなどを惜しみなく提供し、実現してくれた運営の方々を心より賞賛し、深く感謝する。文中の当キャンプに関する表記のうち、目的は運営ウェブサイトより引用したが、他は私が一参加者として捉えた内容を記載している。キャンプに参加した一人の親の印象である旨、ご承知おきいただきたい。同様に、娘の発言や様子についても、親の立場からの観察評価から記載しているものであり、推測を含んでいることを末尾に記す。

参考ウェブサイト

欧州日本語親子キャンプ <https://sites.google.com/view/oyakocamp2022/>

オンライン継承日本語コミュニティー 'EKKA' <https://ekkajapon.com/>